

「最下級の子供たちのための教科書」 ——ウィリアム・ラウトン『実用英文法』と 18世紀中葉のイギリスにおける初等英文法教育

鶴 見 良 次

ウィリアム・ラウトンは、伝統的なラテン文法を踏襲した8品詞体系に対し、4品詞体系を採用した18世紀の改革的な文法家の一人である。彼の『実用英文法』(1734)¹⁾(図1)はチャールズ・ギルドンの『英文法』(1711)やジェームズ・グリーンウッドの『実用英文法試論』(1711)²⁾をはじめ、多くの先行の英文法からさまざまな影響を受けてまとめられたものであり、目立った創見を含まない。³⁾そのため、文法書としては今日ではあまり顧みられることがない。しかし、同書の最も大きな特徴は、副題に見られるように「ラテン文法の難解で不必要な用語」を用いずに「わかりやすい用語となじみのある文体」でわかりやすくまとめられた簡約な内容にあった。チャリティ・スクールなどで受け入れられ、別稿で論じたアン・フィシャーの『新英文法』(1745)⁴⁾などの18世紀半ばにおける4品詞体系による実践文法(practical grammar)の流行の先駆けとなった⁵⁾。当時の初等英語教育では、一般に教理問答書などを用いた基礎的な読み方の練習が中心であったとされ、

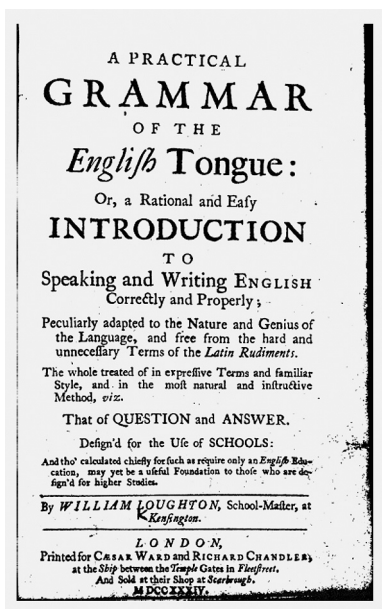


図1 ウィリアム・ラウトン『実用英文法』(1734)扉

文法範疇による説明がどの段階から、どの程度行われたかについては、かならずしも詳らかにされていない。本稿では、実際にキリスト教知識普及協会（The Society for Promoting Christian Knowledge、以下 SPCK と略記）のチャリティ・スクールなどで実際に生徒が教科書として用いたラウトンの『実用英文法』を取り上げ、18世紀中葉の初等英語教育において英文法のどれほどの内容がどのように教えられたのかについて考察する。

I

別稿で紹介したジェームズ・トールボットの『キリスト教徒の教師』（1707）は SPCK が運営するチャリティ・スクールの教師のための指導手引書である。貧しい子供たちに施すべき教育の内容や方法を具体的に示したものであり、18世紀をとおして教師たちによって参照された。同書に示された読み書き教育のカリキュラムは、宗教・道徳教育のそれに比べて簡素である。リーディングとしては、綴字の学習法や音読の注意のほか、聖書や教理問答書などの読み方の練習法が示されている。またライティングに関しては文字の書き方、正しい綴字法、句読法についての注意が1ページほどにまとめられているのみである。文法についての指導の指示は含まれていない⁶⁾。1713年に SPCK 年次報告書⁷⁾に付された教師のための推薦図書一覧に挙げられている文法書は、スタンフォードのチャリティ・スクール教師ウィリアム・ターナーが著した『小英文法』（1710）⁸⁾のみである。同書は SPCK の教科書であり、実際に生徒によって用いられたと思われる。しかし同報告書の生徒向けの推薦書にはこれを含め文法書は挙げられていない。また、最初期のチャリティ・スクールの生徒に配給するための購入図書の記録などにも文法書を特定した計上は見られない⁹⁾。発足当時の SPCK の教育目標は、それまで文字や文に親しんだことのない子供たちにごく初歩のアルファベット＝綴字を教えることであり、いわゆる文法の指導は生徒の理解を越えるものと考えられていた。

しかし、少なくとも世紀半ばに近づく頃には、綴字とごく基礎的なリーディングを身に付けた後に文法についての指導が行われていたことは、いくつかの点から明らかである。まず、この時期に明らかに学校で

用いられたと思われる文法入門書が出版され、そのうちのいくつかはしばしば版を重ねて多くの読者を得ていること、また、それらのなかに学校教師によって著されたものも多いこと、さらに、綴字やリーディングの教科書の序言などで、基礎的な読み方を学んだ生徒に文法書を用いて指導することが教師に助言されていることなどである。

チャリティ・スクールのほかにも、イングリッシュ・スクールと呼ばれるおもに英語を教える中等学校の数が増えた18世紀半ばに最もよく用いられた英文法教科書は、フィシャーのもののほか、ジョン・アッシュの『文法原論』(1760)、そしてロバート・ラウスの『英文法小入門』(1762)である。18世紀中に、それぞれおよそ30版から50版を刷った¹⁰⁾。ラウトンの英文法は、次節で紹介するように版数においては及ばないが、それらの先駆けであった。これらの教科書の多くは低年齢の子供にも用いられるものであった。アッシュの書は、5歳の娘のために著されたものであったが、付された宣伝文によれば、友人が私家版を自らが教える学校で用いた後に編者となって新版として出したものであるという。また1766年版の副題には「10歳以下の子供のための」との文言が追加されている¹¹⁾。作家のファニー・バーニーはアッシュの書を用いて6歳の息子に文法を教えたという¹²⁾。ラウトンの書は自らの学校の「最下級」の生徒のために書かれた。教科書の著者には、ラウトンのように自ら学校を運営する者も多かった。フィシャーも勤労女子のための学校を営んでおり、そこで使う教科書として『新英文法』を出した。

これらの初等英文法は生徒各自が授業中に用いるためのものであったが、一方で、すでにある程度読み書きができるようになった生徒や独習者がよりくわしい知識を得るために学んだものである。初めて読み書きを習う生徒に対する文法教育と、英語の基礎を習得した生徒に対するそれとでは、当然内容や方法に違いがある。いずれの場合にせよ、英文法をどの段階からどの程度学んでいたかを知ることが必要であろう。子供たちが文法の勉強を始める時期とその意義について、18世紀の教育者はどのように考えていたのだろうか。

別稿でくわしく紹介したように、レディングのセント・メアリー教会主任代行司祭フランシス・フォックスによって著された『綴字と読み方入門』(1754年、あるいはそれ以前)はアルファベットや綴字の基礎から学び、聖書物語や祈祷を教材としてリーディングの練習を行うための

教科書である¹³⁾。19世紀の初頭までに21版が出されており、長期にわたって多くの SPCK のチャリティ・スクールなどで用いられた。2部構成から成る同書の第1部の前半はジャンル別に整理された短音節語集、後半はリーディングの教材として旧約聖書物語や世界の格言などが収められている。第2部では、綴字法や句読法などの初歩的な英語学の知識が問答形式で学ばれる。文法範疇による解説は含まれておらず、あくまでも生徒にアルファベットと綴字の初歩を身につけさせ、聖書を読みこなせるようにさせることを目的としたものである。文法指導については、その序言に次のような指示が見られる。

For the use of such children as have time for a more exact knowledge of the *English Tongue*, I would recommend to the Teachers *Mr. LOUGHTON's Practical Grammar*, which book has produced very good effects wherever it has obtained. I heartily wish it were more generally introduced into our English schools, instead of some others of less value, which are commonly used there ; since it would give all those, whose education is confined to the learning of their mother tongue, an adequate notion of it, teach the Fair Sex to write more correctly than most of them have heretofore done, and expedite the studies of those who are designed for the learned languages, by furnishing them with a proper idea of several parts of Grammar, before their entrance on the *Latin Rudiments*.

(iv 頁。原文はイタリック体、強調がローマン体)

この節からは、英語の知識を身につける目的がどのようなものであれ、文法の知識は、生徒が綴字や句読法の基礎を理解した後に、就学年限に余裕のある生徒が次の段階で学び、身につけるべきものであると考えられていることがわかる。そして、文法学習のための教科書としてフォックスが書名を挙げて推薦しているのがラウトンの『実用英文法』である。彼は同書について、類書をしのぐ優れたものであるとして、多くのイングリッシュ・スクールでの採用を薦めている。職に就くために母語のみを学ぶ子供にはそれを正しく理解するうえで、概して書き方の高い能力が期待されていなかった女子にはより正しい書き方を身につけるうえで、

またグラマー・スクールに進学し古典語を学ぶ者には文法についての正しい理解をある程度得ておくうえで役立つものであると褒めそやす。文法は初等英語教育のなかにはっきりと位置づけられているのである。それでは、ラウトンの英文法の教科書はどのようなものであったのか、次に見てゆくこととしよう。

II

ラウトンの『実用英文法』は、1734年に、各地に印刷所を持ち『ヨーク新報』紙の版元としても知られるロンドンのシーザー・ウォードとリチャード・チャンドラー社から出された¹⁴⁾。第2版が翌年に、第3、4、5版がそれぞれ39年、40年、44年に出版された後、55年までに計8版が刷られており、ロングセラーであったと言える¹⁵⁾。週刊文芸誌『ユニヴァーサル・スペクテーター』37年2月26日号に掲載された宣伝文は「1シリング6ペンス。学校教師割引、団体購入割引あり。最も優れた、最も安い文法入門書。好評発売中」¹⁶⁾である。スウィフト全集の編集などで知られる出版者ウィリアム・ボウヤーは、1737年に同書第2版について「改訂第2版。良質紙・大型活字の美しい印刷による瀟洒なポケット版」¹⁷⁾と記録している。

扉ページにあるように、著者はケンジントンの学校教師である。巻頭に出版案内とともにその学校の宣伝文が見られる。それによれば、同校は子供たちが実業に就くために必要な書き方、算数、簿記などの技能を教える寄宿学校であった。この学校についてのそれ以上のことは知られていない。寄付基金、ないしは分担寄付、一般寄付などによって設立されたイングリッシュ・スクールであると思われる。

著者自身についても、それ以外に知られていることは少ない。ただし、教養ある中上流階層の人々と親交のある教育者であったことは推察される。『実用英文法』の献辞に「マウントジョイ子爵ご令息ウィリアム閣下へ」とあるとおり、同書はかつて家庭教師として、幼いころに英語を教えた高貴な家柄の子息に献じられたものである。また、彼と同時代の好古家・図書収集家のウィリアム・オールディスが前世紀の文人オウイン・フェルサムについて触れた文章のなかで、ラウトンが自分（あるいは親族）はフェルサムの縁者であると言っていた記憶があると記してい

る。フェルサムはベン・ジョンソンの追悼記念詩集に寄稿したことでも知られる。オールデイスもラウトンを「ケンジントンの教師」としか紹介していない¹⁸⁾。

出版当時から、フォックス以外にもラウトンの書を高く評価する声があった。『クロムウェル伝』(1739)などで知られる文人ジョン・バンクスは、1738年に「言語の発展——ケンジントン校教師ウィリアム・ラウトン先生へ贈るその『実用英文法』についての詩的エッセイ」(図2)を書き、英語の独自性を主張する立場から、ラウトンの英文法を称賛した。バンクスの評価の要は、万人に役立つ内容の同書が、ラテン文法かなめの概念や用語の流用によって成り立った文法書ではなく、「外国語の用語を使わずに、不適切な品詞の区分もせず、実にわかりやすく、適切で、明快に説明されている」というものである。バンクスは、これまで評価されてきた文法書の多くは「外国産の果実をいっぱいにつけた木々」であったのに対し、同書は「国産である」とする比喻によって、次のように謳う。

Here BRITISH soil is sown with native seeds,

Completely purg'd from GREEK and ROMAN weeds¹⁹⁾

わかりやすい子供向けの英語独自の文法典を編纂することは、ラウトン自身が目指したことであり、彼自身が同書の特質として長い副題に謳ったことであった。副題には「もっぱら英語の本質や特性に合わせ、基本ラテン文法の難解で無用な用語を用いずに」書かれており、「内容のすべてがわかりやすい用語となじみやすい文体で、また「問答法」という最も自然で学びやすい方法で説かれている」とある²⁰⁾。

本稿の冒頭で述べたように、ラウトンは4品詞体系を採っている。それは1710年代のギルドンの英文法以降の流行を汲んでであった。4品詞系統の文法書の最初のものはA・レインの英文典(1700)²¹⁾である。同書においては4品詞は実詞(Substantive)、形容詞(Adjective)、動詞(Verb)、不変化詞(Particle)である。レインの文法に倣ったギルドンがそれらの名称をヴァナキュラーな用語を用いて、それぞれ名前(names)(を表す品詞)、性質(qualities)(を表す品詞)、肯定・断定(words of affirmation)(を表す品詞)、様式(manners of words)(を表

the Progress of Language. A Poetical Essay.
To Mr. WILLIAM LOUGHTON,
Master at Kensington on his *Practical Grammar of the English Tongue.*

VERSE *twice* love that language first
words from *events* flow'd to the thing descri'd,
nature gave the talent of dispute,
mark the man superior to the brute;
in speech was pure, it simply was design'd
clothe ideas rising in the mind;
present sense in picture to impart,
waft the wish that issued from the heart.
in grammar *quies* *not*; for not yet was found
e art to vary, lengthen, and compound;
words were but *scissels*, and those but *few*,
what they miss'd ——— was acted to the view.
now ancient languages are least perplex'd:
in simple roots with artful accents,
note the substance of the *FIXED* TEXT;
see the last polish'd have the least of art,
A *GREEK* echoes fill the open heart.
t *GREEKS*, through ages for *politeness* train'd,
then'd her manners, and her language sale'd:
the source of *ruin* her artifice efforts
in compound epithets, and long protracted words.
on *GREECE* to *ROME* the art of Grammar

stay'd
some rul'd in arms, in learning she obey'd)
here dwelt, till *Pedantry* her schools invade;
hence wrapt in terms, it *dominated* to a trade,
or lost, or blended with barbarian store,
the *Roman* tongue *vernacular* no more,
in its place *new dialects* advance ———
and spread through *SPAIN*, thro' *ITALY*,
(and *FRANCE*,
ude at the first, and form'd as but by chance,
et these grew worthy the *Grammarians*' *Toll*,
to prune the *flowers*, and cultivate the *Soil*:
but grammar then liv'd on the publick spoil.
The monkish *pedagogue* ignorant in schools,
educ'd all language to the *ROMAN* rules;
precepts they gave, in ancient order strung,
but miss'd the genius of each *modern* tongue.
At length to *Britain* these refinements flew,
The same the *masters*, and the *methods* too.
Of *LATIN* terms they cook'd us up a feast,
Declining words that *vary not the least*.
We knew the *less*, the more they aim'd to teach,
And home-born *ENGLISH* seem'd a *learned* speech.
Yet some there were left guilty of pretence,
Who condescended to be TAUGHT by *SENSE*,
Distinguish'd Grammar as by nature fix'd,
Whose rules were general, certain, and unmix'd;
And that from idiom which derives its birth
Unlike in each *new* language on earth.
But still the most for ancient terms were warm
(There dulness *claves*, when genius would reform)
While name and quality as one they shew,
They made *seven* parts, where nature made but two
All this was alter'd by a future hand*
Whom loud applause usher'd thro' the land,
Yet not from custom disengaged quite,
He wrote in verse: ——— for so *OLD* *LESLY* write!

* Printed for Ward and Chandler, Booksellers
at the Ship without Temple Bar, and at York
and Scarborough. Price 1s. 6d.

* Isaac Bickerstaff.

That left reform which *hundreds* wish'd to see,
Thy GRAMMAR shews us, was refer'd for

No foreign terms, no wrong distinctions here,
'Tis all familiar, pertinent, and clear.
Now either *SEX*, while memory is strong,
May hoard the treasures of our native tongue.
For works so humbled to the meanest reach,
Infants may learn, and ancient matrons teach.
All did the name of *ENGLISH* Grammar suit
Some former books that bore it with repute:
So loaded were the trees with foreign fruit:
Here *BRITISH* soil is sown with native seeds,
Completely purg'd from *GREEK* and *ROMAN*

And no apology thy *PROPER* TITLE needs.

AN ITINERANT SONG,

Inscrib'd to Mr. President Austin Ozell.

FOR what do we ramble the town thro' out?
To circle good wine, and good humour about,
With forty good fellows, whose friendship, friend-
Spirit and candour we ne'er can doubt. (Ship
Of all the clubs that distinction claim,
How ancient sower, or grand the name,
Snatch through Great Britain,
You never will hit on,
A set that can match the Itin'rant's fame.

No jars or contentions are ever seen;
Our hearts are sincere, and our looks serene;
Our drinking, and laughing, and singing, singing,
Banish the vapours, and kill the spleen.

Of all, &c.

We boast of no secrets or mystical things,
We hold no cabals about courts or kings,
A tory or whig we count equal, equal,
Party distinction from weakness springs.

Of all, &c.

The man that with spiritlines sings his song,
Or with humorous chat can the mirth prolong;
Or decently rallies, he's welcome, welcome,
Innocent freedoms to friends belong.

Of all, &c.

Thus the church or the state we shall ne'er offend,
Chagrin wife or mistress, or absent friend;
Good fellows, good wine, and good converse, con-
Polish our minds, and our tempers mend. (verse.
Of all, &c.

Then long as *Itinerant Phœbus* shines,
And rambles around the celestial signs;
May we, and successors, still cherish, cherish,
All that good-nature and sense enjoy.

Of all, &c.

MUSE SAT PACIS almae.

Imitated from Page 99.

WHILE *Cotta* smit with love of sacred song,
Sweats at his verse, and fancies all day long,
His loud-tongu'd comfort fiercely throws around
Perpetual thunder, and an endless sound,
Ah! hapless wretch! in vain you rack your brain,
Invoke *Apollo* and the *Muse* in vain!
As well may water wash an *Ethiop* white:
Peace *Phœbus* loves, the *Nine* in peace delight!
Not can the *Muse* thy labour'd strains inspire,
While female clamour drowns the softer lyre.

TALARIUS.

す品詞）と呼んでおり、ラウトンもそれに従っている。英語独自の文法の確立を目指す基本的な姿勢からも、ラウトンの書がギルドンの考えに沿ったものであることは明らかである。ギルドンは『英文法』の序言で「私たちの言語の規則は私たちが現に用いている言語自体から引き出されなければならない、(……) ヘブライ語、ギリシア語、ラテン語などから導き出されたものだと、子供や若者には難し過ぎる」とし、イギリス人の国語意識への高まりを受けて、ラテン文法とは違う体系の英文法の確立を求めた。ラウトンも序言で、「文法一般の目的や趣旨はすべての言語において同じであるとしても、個々の文法規則はそれぞれの言語の性質や特質によって異なる」(vi 頁) とし、ラテン文法の体系で英語を説明することは無意味でばかげていると言う。さらにラウトンは、ラテン文法の方法を英文法に当てはめることの愚かさはジョン・ウォリス以降の文法家の指摘してきたことだが、彼らとて、後にラテン語を学ぶ者たちのために古い用語を残しており、それらは英語のみを学ぶ生徒には無用のものであるとしている。(viii 頁) ラウトンが「わかりやすい用語となじみのある文体で」と述べているのも、ギルドンの考えを踏襲したものである。4 品詞体系といっても、説明においては動詞、形容詞、副詞、前置詞、接続詞など 8 品詞名を用いている点もギルドンと同じである。

III

本論部分は 4 部構成になっている。大まかに普通の文法用語で言うと、第 1 部が文字と品詞、第 2 部が音節、第 3 部が形容詞、動詞と時制、不変化詞、第 4 部が構文、句読法、数詞である。副題にあるように、内容のすべてが問答形式で説明されている。それぞれをややくわしく見てゆこう。必要に応じて普通の文法用語を補って説明してゆく。また、() 内には同書中に挙げられている例の一部を示す場合がある。

第 1 部は 3 章から成る。第 1 章「文法とその分野」では文法の基本概念が説かれる。冒頭第 1 問は「文法の目的、趣旨は何ですか？」である。答えは「話し言葉、書き言葉のいずれにおいても、考えを最も正しく適切に表現する方法を示すことです」である。(1 頁) 第 2 問によって、4 つの文法分野が説明される。すなわち、正音法 (Orthoepy)、正書法

(Orthography)、単語論 (Etymology)²²⁾、統語論 (Syntax) である。詩に関わる韻律論はあえて扱わず、また散文の発音は正音法、正書法の章に含まれるとしている。第2章「文字」では文字と音についての簡単な解説の後、それぞれの小見出しのもとに5つの母音、二重母音、変則二重母音（一方の母音の音が脱落する Aaron、leopard など）が学ばれる。第3章は「子音」である。綴りと音の関係がくわしく説明される。

Q. When must C be sounded hard?

A. C is always sounded hard before *a, o, u, l*, and *r*, as in *can, Cord, Cub, clean, Crab*.

Q. When must *c* be sounded soft?

A. Before *e, i*, and *y*, as in *cease, Cement, City, Cypher*, and before an Apostrophe (') denoting the absence of *e*, as in *plac' d* for *placed*. (p. 23)

さらに綴りと音との関係の不規則性については、たとえば、いずれも [s] 音となる *e, i, y* の前の *s* と *c* をどう使い分けるかを説明するべく、どのような綴りにおいて *s* あるいは *c* が多く用いられるかを「観察」して分類した6ページ近い語群が示されている。(26-32頁) 同様にすべての子音字が、それぞれ母音字や他の子音字との組み合わせによってどのように用いられ、どのように発音されるかが説明される。細かい綴字と発音の規則の叙述には煩雑な印象もあるが、たくさんの例語をともなった説明は要を得ており、リーディングを学び始めた直後から、生徒は語の綴りを正しく発音し、語の音を誤りなく綴る練習ができる。

第2部は音節についての1つの章で成る。音節の定義から始まり、音節の数え方、分節の仕方へと進む。分節には大まかに言えば4つの規則があるとする。1. 1子音字が2母音字に挟まれたときは子音字を後の母音字に付けて分節する (例、O-pen)。2. 同じ子音字が2つ続くときは分節する (例、Bor-row)。3. 語の中に子音字が2つ以上連続するときは分節する。ただし語頭になりうるものは切らない、あるいは、はっきり切って発音しやすい場合はそこで切る (例、Re-store、De spite)。派生語も例外とする。4. 母音字が2つ続くときは、はっきり切って発音されるときは2音節とする (例、Re-enter)。3の規則につ

いては注があり、この分節法には異論もあろうが、個々の音を正しく発音するために適した位置で分節を行うという綴字法の目的に照らして何ら不都合がないと考えた旨記している。(41-44頁) ラウトンの分節法は、ラテン語の綴字法(例、ma-ster)ではなく、英語独自の綴字法(例、mas-ter)によるものである。「異論」というのは、ラテン文法型の分節を採用してきた伝統的文法家たちによるものを指す。ただし今日でも一般に用いられるこの規則3の分節法はラウトンの独創ではない。すでにイライシャ・コールズが『完璧な英語教師』(1674)で、ラテン語のための分節法を英語には合わないとして提示していた²³⁾。英語学習者の音韻的な感覚によりなじみやすい英語独自の分節法を採用することで綴字や発音の練習をしやすくするという発想は、4品詞体系の採用と同様に、この時期の改革的な文法家のラテン文法からの自立の姿勢を示すものであると言える。

第3部では、3つの章でそれぞれ名前(を表す品詞)、性質(を表す品詞)、肯定・否定(を表す品詞)と不変化詞が扱われる。本稿ではこれ以降、前の3つを一般的な文法用語によって名詞、形容詞、動詞と記す。

第1章には「語」と「性」の2つのセクションがある。「語」では、4品詞の基本概念が述べられた後、まず名詞が解説される。名詞の定義は、「物自体を表す」もので、「それを理解するのに他の語を必要としないもの」(47-48頁)である。続けて、一般、固有、人称の3区分と各用法、数、および疑問代名詞の説明がある。人称(代)名詞については、主形態(leading state、140頁ではforegoing state)すなわち主格と、属形態(following state)すなわち属格のそれぞれ単数形、複数形があることが述べられている。伝統的な格(case)という語ないし概念をきらって、形態(state)という用語が用いられている。(56-57頁) 末尾の「性」のセクションでは、英語には「性」はなく、性は4つの方法で区別するとされる。1. 語自体が示す(boy / girl)。2. 形容詞を加える(male-child / female-child)。3. 他の名詞を加える(man servant / maid servant)。4. 語尾に‘ess’、‘ix’などを加える(baron / baroness, administrator / administratrix)。(58-59頁) 伝統的にラテン文法では性は7つ、ラテン文法を基にしたウィリアム・ブローカーの1586年の英文典では6つあるとされた²⁴⁾。それに対しラウトンは、英語には性はない

と断言し、実際の語の運用において性差が示されるという説明を行っているのである。

第2章（誤って「第1章」と印刷されていると思われる）では形容詞が論じられる。第2問「形容詞と他の品詞を見分けるにはどうすればよいですか？」に対する答えは、「それらの語は後に「物・こと」(thing)という語を取ります。as a good Thing, a white Thing, a black Thingなどのように。」(60-61頁)である。その後、名詞が形容詞として用いられる場合のほか、代名詞の所有格、指示代名詞、疑問代名詞と関係代名詞、分詞、冠詞などが説明される。ラテン文法の規範によらない英文法の先駆者ジョン・ウォリスを著者が引き合いに出しているのは、‘the Poems of Milton’を‘Miltons Poems’と言う場合のように、語末にsまたはesをとまって名詞が形容詞として用いられることの説明においてである。ラウトンはこれを「ウォリス博士は所有形容詞 (Adjectives Possessive) と、また最近のある著者は所有性質 (すなわち形容詞) (Possessive Qualities (i. e. Adjectives)) と呼ぶが、むしろ私は英語の唯一の格である属格 (*English Genitive Case*) であると考える」(61頁)と書いている。近代英語においては主格、与格、対格が同一形であることからそう言ったのである。17世紀末以降は一般に-’sと表記されるようになっていたが、ラウトンはアポストロフィを省略した表記にしている²⁵⁾。冠詞については、普通は冠詞と呼ばれるとしている。「比較」は名詞・実詞にない形容詞の特徴として説明されている。いずれの場合も問答のたびに必ず十分な用例が示されており、それぞれの語の具体的な用いられ方の理解が、そのまま文法知識となるように記述されている。

第3章では動詞と不変化詞が扱われる。今日では文法用語として「動詞」の意味で用いられることのない‘affirmation’を、著者は子供の読者にどのように定義するのだろうか。定義を問う第1問の答えは次のようである。「Affirmation、すなわち一般に動詞と呼ばれるものは、あること、為すこと、^{こうむ} 被ること (suffering) (人やものが、他から、いかに、どのように作用や影響を受けるか) を表す品詞です。」(75頁) (図3) これにしたがって、各表現が解説されてゆく。今日の学校文法で言えば、完全自動詞 (Peter is. Peter sits.)、不完全自動詞 (Peter is angry.)、完全他動詞 (Charles beats John.)、受動態 (John is beaten by Charles.) が学ばれる。時制については、英語には現在、過去、未来という3つの

C H A P. III.

Of AFFIRMATIONS.

Q WHAT is an Affirmation?
A. An Affirmation, or Verb, as 'tis commonly call'd, is a Part of Speech that betokeneth *Being, Doing, or Suffering, (i. e. how, or in what Manner one Person or Thing is acted upon, or affected by another.)*

Or it is a Word used when we affirm one Thing of another; as, *a Man is rational, together with the several Circumstances of Person, Number and Time.*

Q. How do the Affirmations signify *Being*?

A. The Affirmations do not only express the simple Existence of Things, as *Peter is, or Peter lives, i. e. exists, or is living, but also the Posture Situation,*

E 2

「時」があり、法 (mood) はない、その他の時や様態は9つの助動詞 (helping affirmation)、すなわち、do, will, shall, may, can, must, ought, have, am / be で表わすとされ、各助動詞の用法が説かれる。87ページには「過去」の小項目が立てられ、動詞の活用が説明される。6ページ分の活用表が挿入されている。章末には3つの「不変化詞」すなわち副詞、前置詞、接続詞を扱うセクションがある。副詞は以下の11の「意味によって区別」(99頁) されている。時 (例 (以下同様)、now, yesterday)、場

図3 『実用英文法』75頁

所 (here, upward)、順序 (above, secondly)、数 (once, seldom)、量 (how much, how great)、性質 (justly, wisely)、肯定 (verily, truly)、否定 (no, not)、疑念 (perhaps, peradventure)、比較 (how, less)、感情 (Heigh, Lo!, Oh)。興味深いのは、間投詞が副詞とともに解説されていることである。意味上の必要から加えられたものと思われる。前置詞の項では、above から without まで、29の前置詞がアルファベット順に31ページにわたってくわしく解説されている。ここでも例文とともに十分な用例が示されている。接続詞は、意味の上から、両立 (consistence)、従属 (dependence)、矛盾・保留 (repugnance, suspension) の3種類に分けられる。両立には連結 (copulative) と譲歩 (concessive) の2つの意味、従属には原因 (causal)、条件 (conditional)、推論 (illative) の3つの意味、そして矛盾・保留には離接 (disjunctive) と例外 (exceptive) の2つの意味があると整理されている。

このように8品詞体系の品詞名が品詞の下部区分として用いられたり、

また4品詞体系の説明に適宜、伝統的品詞体系の用語が加えられた結果、説明中に新旧の品詞体系の用語が混在することになっており、紛らわしい印象も受ける。ただし、品詞を大枠でヴァナキュラーな用語で括することで、母語の文法的な理解を格段にたやすくするという発想が、学校文法として広く英語教師の支持を得た理由であると考えられる。

第4部は第1章が構文 (construction)、第2章が句読法、第3章が略語やローマ数字の勉強に当てられている。

第1章ではセクション別に、構文一般の説明、および形容詞、動詞、不変化詞の構文上の規則が解説される。‘construction’はむしろ各品詞の「文中での位置」というほどの意味である。構文一般についての内容をまとめると以下である。1. 単文と重文、2. 第1文型の語順および、疑問文、命令文、仮定法、強調文などの倒置、3. 2つの助動詞を含む構文 (Could he have done it.)、4. アポストロフィを用いた所有格の位置、5. 主格と属格によって異なる人称代名詞の位置、6. 名詞・実詞以外で主語になりうる語や文、7. 完全自動詞を用いた文。たとえば7の内容は次の問答で示される。

Q. Must the Affirmation have always a Name after it express' d or understood?

A. When the Action, Posture, Disposition, &c. express' d by the Affirmation, does not extend to any other Person or Thing, but terminates in the Subject, Person, or Thing acting, it does not then require a Name after it; as, *I grieve, I rejoice, I run, I fit, I stand, I lie; The Tree grows, I am Sick, &c.* (pp. 141-42)

この構文指導においては、5つの基本文型 (sentence patterns) の提示はない。知っておくべきは、そもそも「文」(sentence) という概念そのものは、17世紀末までは、文法範疇として認められていなかったことである。伝統的にレトリックや論理学の範疇と考えられていたのである。文法書で最初に文の定義を示したのはジョン・ニュートンの『幼い子供の楽しい文法』(1669) であるとされる。いわく、「数語が結びついて完全な意味をなすもの」²⁶⁾。これに倣ってラウトンも「3語以上でまとまった意味をなし、感情や考えを表現するもの」(137頁) と簡略に定義

している。「構文」の指導は文型によるのではなく、品詞中心に、それが文の中でどの位置に置かれ、どの位置に置かれえないかを説明することで行われる。このことは、外国語としての英語の構文を基本文型によって学ぶ私たちには末梢からそれを学んでいるような印象を与えるが、母語の基本的な文構造を知る子供が、正確に話し、書くことを目的とする教育においては合理的である。この場合も、十分な例文が物を言っている。形容詞については、名詞の前に置くとする一般的語順および倒置、形容詞・形容詞相当語句を複数用いる場合の語順のほか、冠詞もここに含まれその位置について説明されている。動詞については、主語の数・人称と動詞の呼応のほか、助動詞、不定詞も肯定・断定を表す語、すなわち動詞のなかまと考えてそれらの用法が説明されている。不変化詞については、副詞、前置詞、接続詞の文中での位置が説かれる。

第2章ではまず5つの主要な句読点（コンマ、セミコロン、コロンの、ピリオド、疑問符）が説明される。たとえばセミコロンの説明は、「(;)」のように上に点のついたコンマである。2つのことを言う際の休止となる。1文中の要素、部分の区分を示す。例、*The Miser enlarges his Desires as Hell; He is a Gulph without a Bottom; All the Success in the World will never fill him.*」(148頁) 続けてその他の12の句読法が解説される。すなわちハイフン、丸かっこ、大かっこ、感嘆符、アイロニー記号、パラグラフ記号、セクション記号、省略記号、インデックス（指印）、注記号として用いるアステリズム（星印）とオベリスク（探検標）など、および脱字挿入記号である。これらのうち、興味を引くのは、今日では言われないアイロニー記号についてのくだりである。「アイロニーとは、言葉を本来とは逆の意味で使うことです。たとえば、不正直もののことを「大変な正直者である！」と言うがごときです。ただしこうした表現のための記号はないので、上記のように、逆さまの感嘆符がその役割を見事に果たしましょう。」(151-52頁) 実際の文章においてアイロニーがこのような句読法によって示されることは多くはなかったように思われる。しかし、こうした解説があるということは、子供たちが触れる文章のなかにこのような句読法を用いたものがあったということ、さらには子供たちにこの書き方を覚えさせるべしとする著者の判断があったことを意味する。

第3章は略語・短縮語、およびローマ数字の説明と一覧である。81の

略語・短縮語の例が示されており、聖書をはじめ、どのような本を読むにも、またどのような文書を書くにも十分なものとなっている。‘Ldp. Lordship’ ‘Wpll. Worshipful’などは今日では一般には用いられない表記であり、当時の人々の読書世界を垣間見させるものとなっている。また‘Mr.’は16、17世紀には master の略語であり、18世紀においても‘Mr.’ ‘Mrs.’は生徒にとっては言うまでもなく「先生」「女の先生」の意である。

これまで紹介したように、同書の内容は包括的でくわしく、母語の正しい読み書きを学ぶチャリティ・スクール、イングリッシュ・スクールの生徒には十分なものである。用例主義とも言うべきたくさんの例の提示を基本とする記述は明示的で簡明である。ときに煩雑な説明も含むが、伝統的な問答形式を採ることで表現の硬さはかなり回避されている。そのため子供の理解に適したものとなっている。

著者の最大の意図は、当時の流行を汲んでラテン文法の用語や理論をできるだけ廃し、英語をヴァナキュラーな用語によって解説することで、それをととして学習者にわかりやすく英語の独自性を理解させることであつた。それが最もはっきり示されているのが、8品詞を4品詞にまで縮減した品詞体系の採用である。では、この英文法教科書は、特に子供の読者にどのように用いられたのだろうか。それを推察するためには、そもそもラウトンがその読者対象としていたのはどの年代の生徒たちであつたのかを考えてみる必要がある。

IV

『実用英文法』の巻頭にはマウントジョイ子爵の息子ウィリアムに宛てた献辞が添えられている。ラウトンはそのなかで、自らの指導法が小さな子供たちのための文法教育においていかに有効なものであるかを示すために、かつての教え子であるウィリアム自身を引き合いに出す。彼がラウトンのもとで学んだ年齢が触れられており、同書の内容が何歳くらいの読者を対象としたものであるかが示唆されている。

I thought I cou'd not more effectually recommend the following
ESSAY to the World, than by saying it contains the Method and
Rules, used in grounding your Lordship in the *English* Tongue, and

with such Success, that tho' your Lordship began late for want of Health, yet, at about eight Years of Age, you were so far Master of these Rules, as to be able to give a better, and more rational Account of the Nature of the *English* Tongue, than a young Gentleman of near twice that Age, and some standing in one of the most noted publick Schools in this Kingdom.

要するに、8歳あるいはそれ以下の子供であっても、この指導法によればたやすく文法規則を習得することができると言っているのである。さらに、子息のごく幼い頃の学習についてしか述べていないことを詫び、彼の長じてからの輝かしい成績について触れていないのは、「最下級の子供たちのための教科書」の献辞にはふさわしくないからであると書いている。

ラウトンの学校の「最下級の子供」とは、何歳くらいの子供たちであったのだろう。チャリティ・スクールの生徒の就学年齢の下限は6歳程度であったことから、一般的にはそれは6歳から8歳くらいと考えることができる。ウィリアムは上層階級の子供であり、また病弱ゆえに遅れて教育を受けだしたともいう。そのため、彼が文法をマスターしたとされる8歳という年齢は、本研究の対象である多くは文盲の、ないしはごく低い読み書き能力しか持たない親のもとで育つ貧しい子供たちへの学校での文法教育の開始年齢の考察にはそのままでは当てはまらない。しかし、少なくとも、多くの子供たちがすでに10歳以下で幾分かは文法を教えられていたのは確かである。

次に問題となるのは、母語教育のカリキュラムにおける文法の位置であろう。すなわち、最下級の生徒は綴字法を学ぶ過程で、折に触れて文法解説を受けていたのか、あるいは、綴字法を十分身につけたうえで、次の段階で文法規則を教えられたのかということである。もちろん、ABCの習い始めにおいて、4品詞の詳細な解説が行われることはない。またその一方で、活用語尾を正しく綴る練習を通して、動詞の語形変化の規則を学ぶといったように、綴字と文法が並行して学ばれることも自然である。要は、教育理念として、文法が綴字法の学習の次の段階に位置づけられていたか、あるいは同時に学ばれるものとして捉えられていたかである。フィッシャーの英文法に付された「指導法」の著者は、「生

徒は、粗雑な読み方であれ、ある程度読めるようになったあとで「文法」を学び始めるものだが、ABCの第一歩から指導してやる方がよいという考えもあろう。そこで私はまず「正音法」(Orthoepy)、すなわち文字の正しい発音から始めようと思う」²⁷⁾と書いている。綴字の標準的な発音を規定する正音法が文法の一部として扱われていることから、初等段階における「文法」は、言語の何らかの規則のこととして理解されていることがわかる。先の引用からもわかるように、ラウトンも「文法」と「規則」をはほぼ同じ意味に用いている。さらに、序言では「文法」を説明する言葉として「指示」あるいは「使い方」などと訳すことができる‘directions’という言葉も用いられている。人間が言葉を使うのは互いに意志の疎通をはかるためであり、文法の役割は、その最適なやり方を言語の「規則と使い方」を示すことで教えることにあるという。(vi頁) これらのことから、この時期の初等英語教育においては、文法は読み書きの学習のかなり初めの段階から、理解させ身につけさせるべき言葉の「規則と使い方」として捉えられていたと考えることができる。

ラウトンの『実用英文法』は、SPCKが初等英語教科書として推薦したことが明らかな、その意味でまれな英文法書の1つである。綴字法を理解した後すぐに聖書の読み方へと進むチャリティ・スクールのリテラリー・カリキュラムにおいて、文法の正確な知識はかならずしも重視されていなかった。しかし、世紀半ばにいたると、世紀初頭以降のリテラシーの相対的な上昇に伴って、基本的な読み書きを習得したうえで、より洗練された英語知識を身につけることが子供たちに求められるようになった。少年期の比較的早い段階で職に就く子供たちのための読み書き教育の充実が求められた。英文法は正しい読み書きを確実にするための諸規則ないしは正しい言葉の使い方を教えるものとして、初等学校のカリキュラムのなかで、計算などとともによりよい就職をするために必要な世俗的な知識として位置づけられるようになる。タルボットの段階ではカリキュラムに含まれていなかった文法が、フォックスでは言及されていることもその現れであると言えよう。

それとともに、この時期になると初等英語教育にふさわしい英文法書のベストセラーが見られるようになる。ラウトンの文法書は、その先駆けであった。それらの多くはそれまでの英文法とは異なり、ラテン文法由来の難解な用語や説明によらないものである。チャリティ・スクール

やイングリッシュ・スクールの生徒が世俗的な技能として正しい母語の読み書きを行うための実用的な知識を得るための手引書であり、それにふさわしい指導法を含んだ文法書と捉えられた。ラウトンの英文典の書名に「実用」の語が付されていることは、それが実際の読み書きのために、具体的な用例を示しながら英文法を簡約に解説したものであることを意味するのである。

V

ラウトンの『実用英文法』は、独創的な文法理論の確立を目指すものではなく、ギルドン以来の4品詞体系を応用して編纂されたものである。また外国人のための語学学習用のものでもない。チャリティ・スクールやイングリッシュ・スクールの年少の生徒が母語の正しい読み書きを身につけるうえで理解すべき実用的な規則を提示したものである。大きな特徴は、1. ラテン文法に由来する難解な用語ではなく、英語話者になじみやすいヴァナキュラーな用語が使われていること、2. 伝統的な8品詞ではなく4品詞体系を採用することで、英文法の大枠をつかみやすくしていること、3. 4品詞体系による文法規則を簡約化して示したこと、4. すべての規則が多くの用例によって説明されていること、5. 教理問答書や教理問答付きABCの本などで、子供たちになじみの問答形式をとっていること、などである。これらの特徴によって、同書は多くの教師や独習者の支持を得た。また本としての流通について言えば、教師割引、団体購入割引の制度に見られるように、教科書の出版とその販売の仕組みがかなり確立した時代の文法書であったこと、特にSPCKの推薦図書となったことで全国の同協会教師が教科書として用いたと考えられることなどもその特質として挙げられる。同書の内容や用いられ方からは、文法規則の教育が綴字とリーディングの学習の早い段階から必要に応じて適宜行われていたことが推察できる。また中心的読者の社会階層がある程度明らかであることから、この時期の初等英文法教科書が一定程度は庶民の子供たちを対象に書かれ出版されたものであることもわかる。そのために、文法体系においても、その指導法においても、わかりやすさが第一に求められた。ラウトンの書は民衆教育の基礎固めが進むイギリスの18世紀中葉における初等英語教育の傾向をよく示す教

科書の一つであったとすることができるのである。

追記 本稿は平成22年度成城大学特別研究助成による研究成果の一部である。

注

- 1) William Loughton, *A Practical Grammar of the English Tongue: or, A Rational and Easy Introduction to Speaking and Writing English Correctly and Properly* (London, 1734).
- 2) Charles Gildon, *A Grammar of the English Tongue, with Notes, Giving the Grounds and Reason of Grammar in General* (1711, London); James Greenwood, *An Essay towards a Practical English Grammar, Describing the Genius and Nature of the English Tongue* (London, 1711).
- 3) 渡部昇一『英語学史』(英語学大系第13巻、大修館、1975)、339-40頁を参照。
- 4) 鶴見が見たものは、[Ann Fisher], *A New Grammar: Being the Most Easy Guide to Speaking and Writing the English Language Properly and Correctly*, 2nd edn (Newcastle, 1750; repr. Menston, 1968). 同書については、拙論「誤文訂正練習法について——アン・フィシャー『新英文法』と18世紀イギリスの初等英文法教育」(『成城イングリッシュ モノグラフ』42号、2010年2月、383-97頁)を見よ。
- 5) Ingrid Tiekens-Boon van Ostade, 'Grammars, Grammarians and Grammar Writings: An Introduction', in *Grammars, Grammarians and Grammar-Writing in Eighteenth-Century England*, ed. by Ingrid Tiekens-Boon van Ostade (Berlin, 2008), pp. 1-14 (p. 6) を参照。
- 6) James Talbott, *The Christian School-Master: or, The Duty of Those Who Are Employ'd in the Publick Instruction of Children: Especially in Charity-Schools* (London, 1782; 1st edn, 1707). 「初期チャリティー・スクールのリテラリー・カリキュラム——18世紀イギリスにおける'English'という教科の成立」(『成城大学短期大学部紀要』34号、2002年3月、1-14頁)を見よ。
- 7) W. O. B. Allen and Edmund McClure, *Two Hundred Years: The History of the Society for Promoting Christian Knowledge, 1698-1898* (London, 1898), pp. 185-87所掲。
- 8) William Turner, *A Short Grammar for the English Tongue: For the Use of English Schools. Dedicated to the Honorable Society for Propagating Christian Knowledge* (London, 1710). 同書については別稿で論じる。
- 9) たとえば J. H. Cardwell, *The Story of a Charity School: Two Centuries of Popular Education in Soho 1699-1899* (London, 1899) 所収のセント・アン

ズ校の経理報告書を参照。

- 10) John Ash, *Grammatical Institutes ; or, Grammar, Adapted to the Genius of the English Tongue* (Worcester, 1760 ; repr. Menston, 1967) ; [Robert Lowth], *A Short Introduction to English Grammar : With Critical Notes* (London, 1762). *The Handbook of the History of English*, ed. by Ans van Kemenade and Bettelou Los (Oxford, 2006), pp. 541-42を参照。
- 11) Ian Michael, *English Grammatical Categories and the Tradition to 1800* (Cambridge, 1970), p. 550、および前掲のAshの復刻版Noteを参照。
- 12) Carol Percy, 'Paradigms for their Sex? Women's Grammars in Late Eighteenth-Century England', *Histoire Épistémologie Langage*, 16-2 (1994), 121-41 (p. 127)を参照。
- 13) Francis Fox, *An Introduction to Spelling and Reading*, 21st edn (London, 1818 ; 1st edn, [in or before] 1754). 「『新約聖書が完璧に読めること』——18世紀イギリスにおける初等リーディング教育の達成目標」(『成城文藝』207号、2009年6月、(22)-(43)頁)を見よ。
- 14) H. R. Plomer, G. H. Bushnell, E. R. McC. Dix, *A Dictionary of the Printers and Booksellers Who Were at Work in England Scotland and Ireland from 1726 to 1775* (Oxford, 1932 ; repr. 1968), pp. 48-49を参照。
- 15) R. C. Alston, *A Bibliography of the English Language from the Invention of Printing to the Year 1800*, corrected reprint of volumes I-X (Ilkley, 1974), I, pp. 18-19を参照。
- 16) John Nichols, *Literary Anecdotes of the Eighteenth Century*, 6 vols (London, 1812-15), II (1812), p. 115に引用されている。
- 17) 同上書、同上頁。
- 18) 'Owen Feltham's Poems', *Gentleman's Magazine*, IX, New Series (1838), 380を参照。
- 19) 'The Progress of Language. A Poetical Essay. To Mr. William Loughton, School-Master at Kensington on his Practical Grammar of the English Tongue', *Gentleman's Magazine*, IX (1739), 655.
- 20) 英語教育における問答を用いた指導法の伝統と発展については、拙論「『教理問答付きABC』の伝統——イギリスのチャリティー・スクールにおける英語綴字教育」(『成城イングリッシュ モノグラフ』40号、2008年3月、265-287頁)を見よ。
- 21) A. Lane, *A Key to the Art of Letters ; or, English a Learned Language, Full of Art, Elegancy and Variety* (London, 1700 ; repr. Menston, 1969).
- 22) この時期における'etymology'の概念と正しい訳語については東京学芸大学名誉教授宇賀正朋先生にご教示いただいた。記して感謝申し上げる。また同先生編集『文法I』(英語学文献解題第4巻、研究社、2010)、3頁を

も参照。

- 23) Ian Michael, *The Teaching of English : From the Sixteenth Century to 1870* (Cambridge, 1987), p. 82を参照。
- 24) Michael, *EGC*, p. 112および渡部の前掲書、71頁を参照。
- 25) 寺澤芳雄編『英語学要語辞典』(研究社、2002)、281頁をも参照。
- 26) John Newton, *School Pastime for Young Children ; or, The Rudiments of Grammar, in an Easie and Delightful Method* (London,[1669]), p.67. Michael, *EGC*, p. 479を参照。
- 27) 'A Letter to the Author', p. 6, in [Fisher].